

第4節 これからの研究の課題

1 体系的な理論の構築

1974年から中学校と高等学校の現場に勤務し、国語教育を担当してきた。その後本務が大学に移り、さらに小学校の現場を兼務した。この間一貫して求めて続けてきたことは、魅力溢れる国語科の授業創りである。授業を創ること、それに先立って授業を構想することこそが、教師の最も基本的かつ重要な仕事だと考えている。常に明日の授業をどうするかという問いを問い続けてきた。授業前の準備の段階からすでに授業は始まっている。そして授業中はもちろん、授業が終わってからもその授業の一環として、個々の学習者の状況には注意深く目配りをしなければならない。

授業の基本には「楽しい」という要素がある。授業の中で、教師も学習者もともに「楽しい」と実感できる瞬間を必ず確保したい。学びを支えるのは、「楽しい」という思いである。それは様々な学びを開くための大きな原動力となる。どのようにして「楽しい」と思えるような要素を授業に取り入れるのかを、まず検討する必要がある。授業開発の第一のポイントは、この「楽しさ」の演出ということになるだろう。

授業の基本的な要素として、いま一つ「力のつく」という要素に配慮しなければならない。その授業を通して、どのような国語の学力を育成するのかということは、授業構想の段階でしっかりと押さえておくべきである。それがそのまま授業の目標となり、さらに評価にも直結する。「魅力溢れる授業」とは、具体的にはこのような「楽しく、力のつく」という原点に立つ授業を意味している。そのような授業を創るために、様々な工夫が必要であった。

授業を構想する際に最も重要なことは、学習者の現実を的確にとらえるということである。学習者の「いま、ここ」をしっかりと見詰めて、彼らの現実を正しく理解しておきたい。本研究においては、学習者が関心を寄せる漫画、アニメーション、音楽、映像、テレビゲーム、携帯電話などに広く目を向けて、国語科の教材として成立する境界線上に位置付けるという試みを続けてきた。多くはサブカルチャーと称されるそれらの素材は、学校の価値観からすれば必ずしも授業に馴染むものではない。しかしながら、学習者の現実と向き合ったとき、あえて取り上げる価値のある素材でもあった。本研究では「楽しく、力のつく」という文脈の中へ位置付けることを試みてきた。それは一つの「国語教育の戦略」であった。

戦略的授業構想に必要な不可欠なものは、やはり教師の不断の努力である。現場の業務量の多さによる多忙を理由に、授業創りにかける情熱を後退させてはならない。教師は、新たな教材の発掘に全力で取り組むべきではあるまいか。

国語科の教師は特に視野を広くして、学習者が興味・関心のある領域をも視野に収めるようにしたい。なおかつ情報を仕入れるアンテナを精一杯高くして、教材開発および授業開発に直結するための様々な情報を収集する必要がある。こうして、常に魅力溢れる授業創りのための基盤をしっかりと築いておかなければならない。

「国語教育の戦略」は常に更新される。一つの戦略が絶対的な効果を長く保ち続けると

いうことはない。時の流れとともに見直され、改訂されるべきものである。そのためにも、様々な実践を交流することが重要である。それらの実践を記述し、交流することによって、新たな戦略を次々と生み出すことができればよい。そして、実践の中から帰納的紡ぎ出された理論を大切にしたい。本研究では実践を記述し、そこから帰納的に国語教育の理論を引き出すことを基本的な姿勢として取り組んできたことになる。

わたくしの試みは、「境界線上の教材」としてのサブカルチャー教材を、決して補助的な副教材としてではなく、中心となる主教材・本教材として用いることであった。広く21世紀の国語教育を考える際に、この試みは一つの可能性を提起してくれると信じている。そして本研究の中で、わたくしは常に実践を重視してきた。本研究において紹介したのは、すべてがわたくし自身の実践に裏打ちされたものである。先行研究および先行実践を着実に取り込みつつ、実践を通して授業の可能性を追求してきた。再度述べるが、本研究では具体的な授業内容の記述を中心とした。そしてその授業の中に、国語教育の理論を組み込むように心がけてきた。授業を構想する際に、先行研究・先行実践を踏まえた国語教育の理論は不可欠だからである。ただし本研究では、実践から定位した理論の体系的な整理は達成できていない。今後の最大の課題は、実践から導き出した理論を体系的に記述することである。

2 国語科教師教育への展開

最近の国語教育関係の学会での研究発表内容や、多くの関連する分野の研究論文の中には、わたくしが長く取り組んできた課題に関わるものが増えてきた。また国語科教科書の傾向を見ると、「境界線上の教材」が国語科の「教材」へと推移しつつあることを実感する。担当が中学校・高等学校の中等教育から大学・大学院という高等教育に移ったことから、今後は国語科教師教育の課題に含めて追究するなどの対応を考えながら、本研究の研究課題には継続して向き合っていきたい。

いま大学で毎年多くの教師志望の学生や院生と接するわけだが、彼らを魅力ある国語教師に育成したいという切実な目標がある。2007年現在、現代日本は深刻な少子化の時代を迎えて、学習者の質的な変容が問題になりつつある。たとえば高校生の大学への進学に対する考え方も、従前とは明らかに様変わりしている。苦勞をして尊いものを獲得しようという意識は背景に退いて、徹底したエンターテインメント志向がはびこるようになった。大学入試のシステムも従前とは異なって、推薦入試を中心とした多様な形態の試験が実施されるようになった。教員志望の学生が自らの経験のみを頼りに学習者の実像を把握しようとする方向には、限界が見えてくる。多様な学習者に対応することができるような、柔軟な感性を持った教師を養成しなければならない。加えて、国際化が加速する時代の中で、国語教師の在り方も大きく見直される必要がある。

わたくしは早稲田大学教育学部において1997年度から継続して「国語科教育法」を担当し、2002年度からは国語科教員免許取得希望者が履修を義務付けられた「国語表現論」も担当している。これらの担当科目の授業内容に関わる問題意識に関しては、いくつかの機会に公表してきた¹。加えて、大学の授業改善に向けての提言もまとめてきた²。これからの課題は、本研究において論じてきた内容を踏まえながら、担当する「国語科教

育法」および「国語表現論」の授業の効果的な扱い方に焦点を絞って、教師教育のカリキュラムの中にしっかりと位置付けを試みることである。現在、高等教育に関わる授業研究が盛んになり、大学の授業改善に向けて様々な方策を試みる必要性が問われている³。大学は研究の場であると同時に高等教育の場でもある。大学教員が授業内容の充実を図るのは当然のことである。本研究では主として中等教育現場における実践を扱ってきたわけだが、これからは高等教育の課題に即した研究に取り組むことにする。

国語科教師教育に関わる授業の内容を検討すると、国語教育の様々な課題と出会う。それらに対する研究を深めながら、同時に大学の国語教育関連科目の授業内容の充実を求めするのは、決して無理なことではない。それどころか、研究と実践の両立はむしろ当然のことというべきであろう。単に国語教育研究を「研究」として深めるだけではなく、その成果を常に「実践」にフィードバックするように心がけなければならない。これからますます国際化が進むことが予測される現在、どのような国語の授業が求められているのかを明らかにしつつ、理想的な授業の在り方を提案することは、大学の国語教育担当者の重要な仕事である。大学における授業研究の活性化は、国語教育研究の活性化に直結すると考えている。特に国語科教師教育の充実に向けて、これから本研究の成果を踏まえた授業研究を推進したいと考えている。本研究で取り組んだことは、そのまま継続して大学の教師教育で扱うことができる。研究の成果をいかに効果的に国語科教師教育へと展開するか、それもまたこれからの重要な課題である。

注

- 1 町田守弘「『国語科教育法』の授業論—大学の授業改善に向けて」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要・第十三号』早稲田大学大学院教育学研究科、2003. 3）、同「大学における『国語表現』の授業構想」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要・第十四号』早稲田大学大学院教育学研究科、2004. 3）など。
- 2 町田守弘「大学の授業改善への一視点—『国語』関連科目の場合」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要・第十五号』早稲田大学大学院教育学研究科、2005. 3）など。
- 3 筆者の所属する、大学教育学会、日本高等教育学会等においても、大学の授業改善に関する実践研究が展開されている。